

スリランカは世界屈指の宝石の産地であると知られている。最近では、英国のチャールズ皇太子がダイアナ元妃に贈ったエンゲージリングが、スリランカサファイアであったことが有名である。

13世紀、マルコポーロも『東方見聞録』に、セイロン島の宝石は如何にすばらしいか記されている。もっと遡れば、紀元前の太古、スリランカルビーをソロモン王がシヴァの女王に捧げたと語り伝えがある。他面、スリランカホロスコープこと占星術と宝石は関係が深く、出産から結婚の相性、死に至るまで占い師との絡みがある。勿論、国家行事の開始時間にも影響を及ぼしていると聞く。

日本ではそれ程ではないが、先般、東京代々木に在るスリランカ人経営の宝石ショップを覗いてみた。オーナーの占いによってパワー・ストーンが決まり、お客はお守りとして買っていくと云う。

生活に入り込んでいる開運法星占いやパワー・ストーンを、辿ってみれば、古のスリランカ大乘仏教布教法の名残りのように考えられる。「人間」の問題「苦の世界」がなくなる限り続いていくに相違ない。

星占いと宝石の背景

スリランカではライフステージに占いが付きものらしい。人々は星占いをしてもらったその足でジュエリーショップへ直行して護身用の宝石を購入しパワーを授かる。占星術は太陽と月の運行を基準としたもので、生まれた年月日と時間における星の軌道や位置によって 将来迎える運命を占う。占星術はメソポタミア地域を源流にして、インドからスリランカに伝播してきたと言われている。

ラトゥナプラの教訓

ラトゥナプラとは宝石の都の意味である。1990年、ラトゥナプラを訪れた時の私の記憶で

は、コロンボから南東に走ったことや、途中、椰子林やゴム園などを眺めながら着いた所が小さな町並であったこと、聖なる足跡の意味を持つ「スリーパーダ」の山についての話が、心に残っている。その後、ソーマシリ師も「スリーパーダ」の山について下記のお話をされた。

「スリーパーダは北の聖なる山々がモンスーンを遮るので雨が多く降ります。山頂の仏足跡近くになると寒さでふるえます。仏教やヒンドゥ教徒、イスラム教やキリスト教・・・などが共有する聖地で、宗教によって線引きされてない山です。宗派を超えた信仰の対象として、様々な宗派の人たちが、スリーパーダの険しい山道を登ります。スリランカは、小さな国に多民族が住むことによる問題を抱えています。全ての人間の生命を同等のものとし、巡礼者も旅人も聖者もこの山を崇拝します。登り口は2つで、ナラタニアとラトゥナプラからです。前者の方は後者より距離は短く険しさも少ない・・・。下山の道も同じ道を下るけれど、気をつけて歩かないと間違えてしまうことがあります」

私は、師の話を聞いて、即座に、「スリーパーダ」登山は人生そのものだと思った。私の生き方には「ラトゥナプラ」で得た教訓が深く関わっている。

一攫千金の夢

日本で宝石の鉱山と云えば、山梨県甲府の水晶の山が浮かんでくる。スリランカではラトゥナプラの街外れの畑や川底のような宝石採掘現場を思い出す。宝石が無尽蔵に採れるのであろうか。壁のない屋根付き掘っ立て小屋があちこちに点在していた。そして、その掘っ建て小屋の中に井戸が掘られている。深さは1～2米m位か、訊きそびれた。近づいてみると、井戸にポンプが取り付け



ラトゥナブラ近郊のサファイヤ原石採掘場
(パノラミオから転載 <http://www.panoramio.com/photo/73702792>)

であった。ポンプに結ばれたロープを引き上げると土がどっさり、箆の上に盛りあがる。小さなプールで洗い、箆の中に残った小石の中から原石を探し出す。大昔から変わらない方法だと聞いた。近年の機具を導入すれば楽なはずだが、原石が破損しかねないからか、経済的な事情に依るのかと考えた。宝探しには、あの宝石の赤、青、緑の輝きが長い間に培われた勘のようなものも必要なのである。

汚れた水の中で一日中同じ作業をしても、収入に繋がるとは限らない。かといって現実に、一攫千金を夢みて財を成した人もいるので、多くの人々がチャレンジしている。然し、観光スポットとしてたくましく生活の糧を得ている者もいる。

わたしにとってジュエリーとは

ジュエリーはうっ虚ろいの世界である。博物館で原石が陳列されている。一つ一つ説明を受けながら別室のカット場に移ると、指輪になるのは、通常、親指の大きさの原石である。形を整えるために削り落とされて行く過程を観た。原石は「磨けば光る石」として人の目に留まれば、いろどり色彩鮮やかに変身して、人手に渡り高価な指の華として社交界にもお供できる運命が待っている。スリランカに初めて訪れ、博物館を訪れた頃の私は周囲から羨ましがられるような生活であった。女性国際ロータ

リアンの草分けとして、教育界の第一人者である鷗川昇先生から推され会員であったが、その内実はいつも虚しい日々であった。

何故であろうか。その頃は、シーギリア、アヌラダプラ、ポロンナルワの遺跡群以上に、キャンディーのジュエリーショップに魅せられ、胸を踊らせた。そして、ふたたび再度、スリランカを訪れることはないであろうと思いながら、記念として、キャッツアイを買った。あの日から20数年も経過したが、ガンパハ市のサマハヴィハラヤ^注とのご縁が続いている。

2015年10月、キャンディーの豪華でモダンな宝石店に入ってみたが、目の輝く石にうっとりとはしたが買わずに出てきた。宝石に胸を轟かせたあの若い日は、一体、何だったのだろうか。どの宝石でも自分のもの出来る恵まれた日々と、人並の暮らしであることに満たされている今との、気持ちのギャップが交錯する。改めて自分の人生を振り返ってみている。

注) ガンパハ市のサマハヴィハラヤ：日本名「平和寺」タランガッレ・ソーマシリ師を住職としている。'わんりい' 206号、松林蓉子さんのスリランカ紀行①「スリランカの日曜学校と仏教について」を参照ください。